

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	幼児のことばの発達の実態とその分析：ことばで地図を描こう： —イメージをどう言語化するか—の調査と研究
Author(s)	島崎, 時子
Citation	児童の言語生態研究, 5 : 52 - 57
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045060">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045060</a>
Right	
Relation	



# Ⅱ 幼児のことばの発達の実態とその分析Ⅱ

## ことばで地図を描こう

——イメージをどう言語化するか——の調査と研究

島崎時子

私達は子供たちのことばをただ漠然と集録するのではなく、一ツの副題を設定しそれにそって子供たちの実態をとらえてみた。その副題が「ことばで地図を描こう」である。副題の設定理由は、子供たちが頭の中に地図を描く時、説明が始まると同時にその子の頭の中に現われる対象物がどんどん移り変わって行く姿をとらえる。つまり、移り変わる対象のイメージを子供たちはどう言語化しているかをみる為である。

その実態調査と考察である。

研究の対象となった幼稚園の環境と研究方法は下記のとおりである。

### I 環境

横浜市のはずれ、近年住宅の増加の著しい相模鉄道沿線鶴ヶ峰駅近くに位置し、静かな住宅地に囲まれ周

辺には田圃、川、畑、林等があり自然に恵まれている。幼稚園は丘の上であり周囲の地形はかなり起伏がある。通園路に新幹線のガード、相模鉄道の踏切り等がありそれを通って通園する者が半数いる。

### II 研究方法

対象児 三才児13名、四才児140名、五才児140名をそれぞれランダムにグループA、Bに分け、グループAの子供には幼稚園から自分の家までの道をことばだけで説明してもらい、グループBの子供には、まず、紙に幼稚園から自分の家までの地図を描いてもらい、更に、その地図をことばで説明してもらった。

### III 研究内容

A 語いの整理

指導上、地図に関係のある項目

を子供のことばの中から見出し、その項目にそって語いを整理した。それが下記の表Aである。尚表Bは子供が使用した地図に関係のある語いの数を項目ごとに統計を出し、更に、それらの語いをプラス面(選択意識が見られることば)と、マイナス面(無意識、ただの思いつきのことば)に分けてそれを数字で表にまとめた。

### B 各年令に於ける比較考察

1 印象的に強いものが地理的目印に変わりつつある。恣意的にとらえた印象物を社会一般に共通する地理的目印に変えつつある姿をとらえる。

例 三才児 「おばあちゃん」

「おちゃんの家」

四才児 「坂」「階段」

「おちゃんの家」

五才児 「駅」「学校」

「お店」

三才児が使っていた目印としてのことばには、まったく自分勝手な印象的なとらえ方で言語化している傾向が強くみられ、四才児になると感覚的に、体で強くうけとっている印象物が強く残されていた。五才児になると社会一般に共通するような地理的な目印を多く使い出している姿がみられる。

### 2 移動経過の表わし方の発達

イ 順次性：移動経過を順序のつながり度でどう表

表 A

項目 年令	三才			四才			五才		
	目	印	移動	方向指示	位置の決定	接続詞の用法	訂正		
	山、畑、道、お豆、横断歩道、階段、小学校、遊園地、の家、まがるここ	ずーっと、行く、通る、渡る、のぼる、降りる、見える、乗る	まがる こつち まっすぐ	あそこ ここ そこ	また そうすると				
	あひる、葉っぱ、家階段、坂、道路、畑ガード、ガードレール、電車のとこ、アパート、玄関、お店小学校、飯場、の家	ずーっと、すぐ、行く、通る、出る、来る、渡る、のぼる、降りる、見える、くぐる、まわる、ちよっと、ぐるぐる	まがる まっすぐ あつち そつち こつち	あそこ、ここ、そこ、隣り、並んでいる所 その中、すぐ前 つきあたり 軒目	また そうすると				
	の家、旗、門、看板、草むら、ビル、広場、静かな森、二つの道、森の道、私の待つている所、川畑、田んぼ、横断歩道、階段、ジャリ道凸凹道、トンネル、電車、アパート、学校、駐車場、教会、お医者さん、踏切り、号、階、駅、線路、新幹線、ポスト、向い屋	ずーっと、すぐ、少し、もつと、行く、通る、出る、来る、渡る、乗る、のぼる、降りる、見える、またぐ、回数	まがる まっすぐ あつち そつち こつち 右、左	そこ、ここ、あそこ、の隣り のの前、ののはじ、の裏、の階段、の軒目、右、左のの前後 いちばん下から いちばん向こう	また、 こんど そうしたら		反対 違うこつち（手前） こつち行かないで こつち行って		

表 B

項目 年令	目		印		移動		方向指示		位置の決定		接続詞の用法		訂正		計						
	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-					
3才	18	+	11%	17	+	41%	10	+	10%	5	+	0%	ナ	シ	ナ	シ	50	+	20%		
		-	89%		-	59%		-	90%		-	100%						-	80%		
4才	62	+	25%	80	+	28%	83	+	14%	7	+	29%	10	+	100%	ナ	シ	242	+	25%	
		-	75%		-	72%		-	86%		-	71%		-	0%				-	75%	
5才	104	+	60%	89	+	56%	110	+	35%	13	+	85%	18	+	100%	3	+	100%	337	+	54%
		-	40%		-	44%		-	65%		-	15%		-	0%		-	0%		-	46%

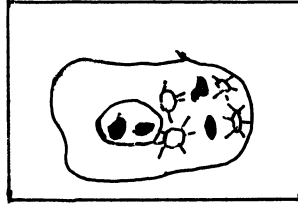
わしているか。

三才「小学校のそば、自動車の遊園地のそばでよしえちゃんちのそば」

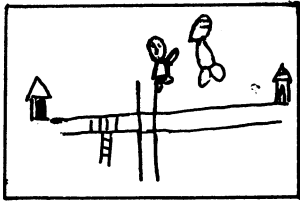
四才「幼稚園、階段、くみ子の家」

五才「ここグリーンヒルでしょ、こっち行ってこっち行ってこう行って、ここお店屋でね学校でね、ここお店屋でね 略」

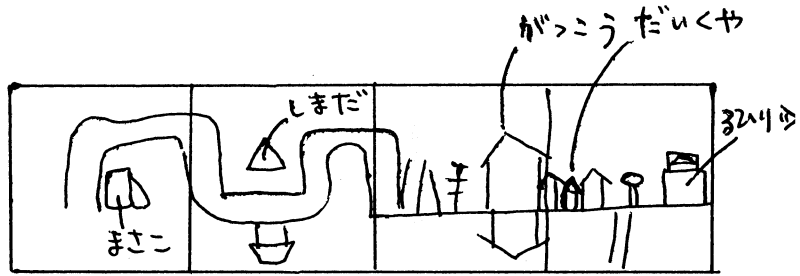
三才



四才



五才



三才児に於いて上記の地図をみても、こどもの地図の説明を聞いてもわかるように、物から物、ある地点から地点までをつながりとして結びつけるより、ただ雑然と思いつくがままの関係づけが成されている。四才児になると、地図ことばでは点から点までのつながりを一本の線として表わ

すことはできていなくても、点を順序よく並べて位置とることによって順次性を意識しだしていることがわかる。その点の並びの特徴は終始点の間に、まん中どりを一点だけ示し、経過を現わしている。五才児になると目印の地点を順序よく並べることによって移動の経過を現わしている。四才児に見られたまんなかの点どりと異なり、一つの点から次の点を結び順序のつながりを意識している姿が見られる。

距離、時間感：長さをどうとらえているか。

三才「ずーっと行って」

四才「ずーっと行って」

五才「ずーっと行って」

三才児が長さを現わすことばとして使っていたのは「ずーっと」ということばだけであったということは大変興味深いことである。つまり距離とか時間とかいう意識は三才児に於いてはまだ鮮明にされていないようである。四才児になると「ずーっと」ということばの他に「すぐ」「ちよっと」ということばを使うことによつて距離、時間的な意識を比較的眼でとらえ出していることを理解することが

できる。また「グルグル」「グルッ」とのような擬態語で感覚的な言語表現をしている姿がみられた。五才児になると更に「もっと」ということばが使われている。これは注意すべきことばだと思ふ。「もっと」ということばにはふつう延長の意識がみられると思うのだが子供は延長する前の段階にいるのではないかと思うのである。つまり延長をとらえる前の段階として、限界の基準をとらえているのである。

二点関係感：移動を表わす時、定められた場所に向つてどのように関係づけがなされているか。

三才「あそこんとこの道があるでしょ、あそこんとこずーっと行ってさ、あそこがあたしんち」

四才「あの坂道通って行くとね、しんちゃんちがあるでしょー略ー」

五才「一略ーこっから、ここまで来たら一略ー」

三才児の説明には一つの目標をめざしている姿はみられる

が、その目標の地点が「あそこ」ということばである為に目標がボケてしまふ。尚、経過の動きを現わす時の目標は二点の関係を結ぶのではなく、目標とされている対象は常に流されている。四才児になると二点の関係を結んで経過を現わしているが、その指示はまだまだ恣意的である。五才児になると「〜から〜まで」というように経過を現わすための指示がはっきりなされ、二点間の区切りをつけだしていることがわかる。

ニ 特徴物を経過点とする：強く印象に残る場所に於いて現われる移動を見る。

三才「横断歩道を手あげて渡って 略」

四才「坂（あるいは階段）をおりる」

五才「どぶの所またいで渡る」

「新幹線のとこくぐる」

三才、四才、五才共、体で感覚的行為的に経過がとらえられるもの、特に体を特別に動かすことよって覚えられているようである。

直線の連続感と方向指示につ

いて。一方向経過を意識することは線を意識することであるのかどうか

イ 直線の継続から直線の屈折へ：道の線をまっすぐとらえている段階からまっすぐな線を折ること（角をとること）によって方向転換が意識される。

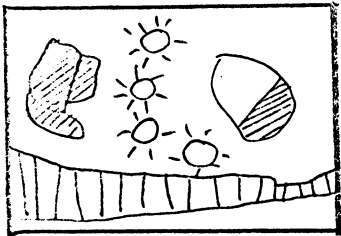
三才「ずーっと行って、ずーっと行くとボクんち」

四才「〜そこ門まっすぐ行って、そこ左にまがって」

五才「〜ここにまがり角があるの、こっちまがっちゃうと新幹線のガードになっちゃうからだめの〜」

三才児が自分の家までの地図を頭の中に描いた時、その道はまっすぐらに自分の家に向かっていて、自分の家に直接関係のない道は全然眼中にない。つまり、三才児にとって道は、自分が歩く道ただ一本なのである。それ故「ずーっと、ずーっと」行けば自然と自分の家に着くというのである。しかし、地図の上ではことばの説明のようにまっすぐとはいかず、道を現わす線はゴチャゴチャである。またこ

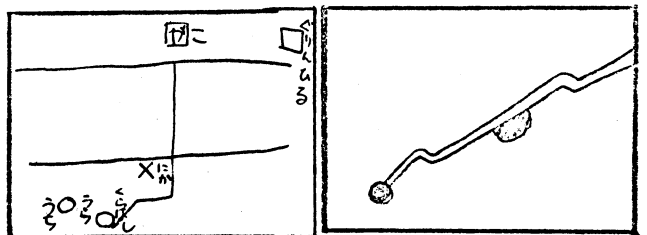
三才



とばの説明に「まがる」という表現がある程度使われているが「まっすぐ」という言語表現が成されていないのは興味深い。つまり「まっすぐ」と「ずーっと」ということばの理解に問題があるのではないかと思われる。四才児になるとまっすぐの線を折ることによって方向を意識し、左右の意識にまで気がとまる子供もいるが、その意識はまだまだあいまいである。五才児になると直線を折ることは方角を定めることはっきりつながら、その方向指示は、他の道との関連づけをし、選択意識を持ちだしていることがはっきりと理解できる。

四才

五才



三才児は道を終始点のつながりの線としては表わさず、ただ物的に羅列してあるだけである。四才児になると一本線で終始点を結ぶことも多く角を意識している姿も多くみられるが、そのとらえ方は感覚的な意識が強く、向きが変わるということで無意識に角をとらえている場合が多い。五才児になると出発点から終着点までの道を他の道と関連を持って全体を把握し方角に

4

選択意識を見いだしていることが明らかにされている。L字の角は描かれているが、カーブ線を描いているのはごく少数のこどもだけであることからL字の角は身体的にも感覚的にもとらえやすいが、カーブの線は全体的に線を見ることのできないにとらえにくい。その辺がカーブの線を見出しにくい一ツの問題点となるのではないだろうか。

三才「遊園地のそば」

四才「あつや君の家の隣り」

「のの前」

五才「いつもわたしが待っている所があるの、その前のとこかなんかにお医者さんがあるの、その隣り」

「坂んところをずーっとおりていって左。上にあがって来ると右」

三才児に於ける位置の決定は「そば」ということばで他との関係づけはなされてはいるが、その関係づけは点と点との関係づけではなく、もっとあいまいな点と範囲の関係づけで位置決定をしている。それが四才児に

5

なると「の隣」「のの前」というように二点どりで位置の決定をしている。更に五才児になると位置どりの視点が直線上の並びだけでなく、縦横の三点の関係をとらえることによって位置決定をしている。また立場を転換をすることによって明確に位置を定めようとするこどもも現われた。

縮尺の比率への接近をどう果しているのか。地図の縮尺の比率を見て全体と部分との関係をどうとらえているか。

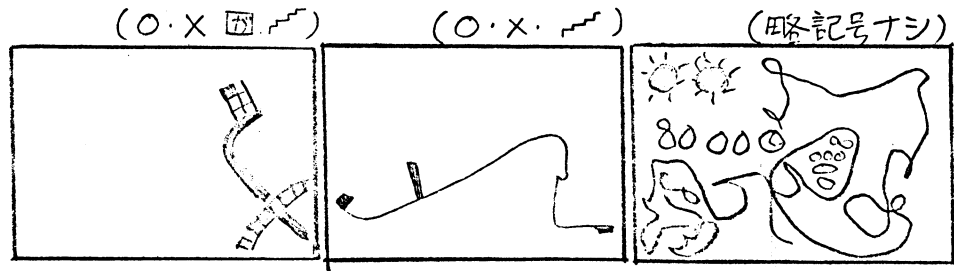
三才 自分の家のごく近辺の説明が多く終始点の関連がない。全体と部分の関連性がないのはもちろんのこと、ある一部分の集中的な説明もない。思いつくがままのメチャクチャの説明が多い。

四才 終始地点の近辺の拡大図説明が目立ち、強く印象に残っている所を集中的に拡大する。

五才 出発点から終着点までを関連的にとらえてはいるが途中に混み入った所(目印になるものがたくさんある所)があると細かく説明しすぎる為、全体とのバランスがとれなくなることがある。

6

六角、方向、位置の決定能力を示す子供達の用紙の中の地図の配置とその略記号。



三才

四才

五才

三才児の用紙の中の地図の配置は紙全体をためらうことなく使い、略記号はほとんどみられない。四才児になると方角の意識が芽ばえて来ているらしくあいまいではあるが出発点から終着点までのつながりを感覚的な方角で結びつけている。用紙の中の地図の配置は、用紙のまん中というところが意識的なくらいに中央にうまく描かれている傾向がみられる。略記号についてみると階段、三二二、のような平面型と、のような立体型があり、後は終始点を記号化してO、Xで表わされている。五才児の大きな特徴は紙のつぎ足しである。つまり一枚の用紙に描ききれなくなると紙をつぎ足す。その紙のつぎ足しにもおもしろい姿がみられる。それは紙のつぎ足しをしていたほとんどこどもが横へ横へとつぎ足していたのである。このことから私達は次のようなことに気づいたのである。いくら道の線を曲りくねって描いていても全体的に流れているこどもの視線は紙のつぎ足しのように、ある一方方向に直線的に流れているのではないかと思うのである。また用

紙の中の地図の配置についても

おもしろいことものを姿を捕えることができる。三才、四才の子が用紙のまん中に自然に地図を描いているのに対し、五才児は用紙のはじっこに地図を描き空白の部分がたくさんできてしまうという傾向が見られる。つまり五才児になると地図を描く作業にとりかかる前にまず見通しをたてるという姿勢が芽ばえて来ている為、途中で描ききれなくならないようにと出発点をはじっこに定める。そこまでは実に賢明な姿なのだがやはり五才児は五才児。実際地図を描き出すと全体を見ながら描くことができず、自分が描いている部分的な所にだけ神経が集中してしまふ。そして出来上がった地図をみると用紙と描かれた地図のバランスがとれていないという結果になってしまうのである。尚、略記号に関しては五才児になると文字の指示がみられる。その表記されている文字が記号化されて、例えば、「がっこう」を「が」だけで示し、文字を分解して文字を表現の手段として使用している。

7 具体的作業中に現われた諸特

徴から問題点を見つづける。

イ 地図製作及び説明中での訂

正は何を意味するか。

大人から見れば全くメチャクチャな地図を描いている最中に「あつ間違えちゃった。」と言って考え込んでいた。その子にとって間違うとは一体何んなのであろう。一体何に気付いたのだろう、ということに眼を向けさせられる。

ロ 「近過ぎて描けない」といった子供のことばの意味するものは何か。

幼稚園のすぐ前に住んでいる子供が幼稚園にあまりにも近い為「地図に描くことができなない。」と言った子供の心は一体何を意識しているのかを考えさせられる。

〇 この実態調査から現われた、三才児、四才児、五才児の特徴。

以上の考察から「ことばで地図を描こう」に於けるイメージの言語化を子供達はどうとらえていたかを、年令ごとに大きくつかんでみる。

三才児 思いつくがままの言語は

多く視点が定まっていない。描  
従って筋道がたたない。描

き現わした地図とことばが一致していない。

四才児 思いつきの印象と整理さ

れた印象が半々で視点は定まっているがそれを現わす表現が、あいまいである。感覚的、身体的に受けとめている印象が強く現わされている。

五才児 社会一般に共通性のある

視点を定めようとし、そこには相手の立場を考える意識が芽ばえてきている。また視点を定める時、関連性を持たせて筋を通していうとする姿が見られる。

視点とすることを取りあげても、五才児に使われた視点と、三才児に使われた視点は異なり三才児に於いては「定まらない視点」が彼等の視点であり、四才児に於いては「あいまいな視点」が四才児の視点であり、五才児に於いては「関連性を持った視点」が五才児の視点となっているということである。

D この研究を通して

子供に秘められている基本的な能力（知育、身体、感情、生活習慣、習得）と保育計画のねらい内容とが互いに投射されることによ

って生きた保育たり得る。

1 子供の実態を見る目と保育の観点との接近焦点化を計らねばならぬこと。

2 子供におけるイメージと言語表現との間隙、障害の問題点を更に見極めねばならぬこと。

3 話し手、聞き手、との関係また両者における話題についての了解度の差異の理解をいかにして子供たちに得させしめるか。

4 子供たちの知覚のそれぞれの年令における限界の除去の機会をいかに設定するか。

（以上の研究報告は、昭和四十六年度  
神奈川県幼稚園教育課程研究会  
8/23 於横浜市 発表 10/5 県代表として昭和四十六年度全国東部地区  
1 幼稚園教育指導者講座に出席、その  
時提出したものである）

